
解釈の問題に試される生成批評

鎌田 隆行

〈信州大学〉

おそらく広く認知されているはずの事柄から始めると、生成批評はフランスの文学研究の領域においてここ数十年間で最も発展したアプローチの一つである。だが、その学術的な、また組織上の躍進ぶりはかつてしばしば物議を醸し、ことによるとある種の論者によってはいまなお問題含みかもしれない¹。というのも、生成批評は1960年代～70年代に、一見したところ反時代的な形で登場し、文学批評の対象を革新的に再定義したため、近接領域の方法論に対する相対的な否定へと至らざるをえなかったからだ。これらの方法論の側は生成論に多くの批判を投じたのである。

こうした論争の核心は、生成批評の解釈的有効性をめぐるものであると思われる。ある文学作品の成立の諸段階を検討することは、果たしてその作品をよりよく読むことを本当に可能にするのだろうか？ 端的に言えばこれが生成論研究者に対してその敵対者からことあるごとに突きつけられてきた問題である。この論争はいまなお終結していないが、生成論が本格的に成果を示すべき展望を考察する素材を与えてくれるものである。

以上がこれから詳しくたどっていくべき論述の道筋である。まず生成批評の立ち上げと展開を一瞥した後、その解釈的能力の問題について検討を行っていく²。

生成批評の前提と目的

生成批評の登場は1960年代に遡る。折しも、文学研究や人文科学の他の諸領域において構造主義の影響が絶大であった時代である。テキストの自立性という概念が極端に押し進められ、特にロラン・バルトが1968年に「作者」の死の宣告を行ったことはよく知られている。この著名なマニフェストは、伝記的な事柄によって決定づけられ、作品——読者は作者の意図を復元して「解読」しなければならないとされる——に対して因果論的先行関係にあるとみなされる作者の圧政を糾弾するものであった。バルトによれば、このような伝統的体制は新しい体制にとって代わられるべきもので、新体制のもとでは、「テキスト」は作者への従属から解放された読者が意味作用の探求へと身を投じる相互作用の場となる³。こうした革新的提言のインパクトは大きく、源泉研究や伝記的研究などの旧来の方法論はもはや無効と捉えられるようになってい

1 例えば多くの点で示唆的な書物である Daniel Ferrer, *Logiques du brouillon. Modèles pour une critique génétique* (Seuil, 2011) についての否定的な書評は次のように書き始められている——「草稿や修正された校正刷りなど、最終的な刊行に先立つあらゆる形態のテキストの研究に基づく生成論は概して不評である」(Maxime Rovere, *Le Magazine littéraire*, n° 510, juillet-août 2011, p. 43).

2 本発表は名古屋大学グローバル COE 研究拠点が以前に開催したシンポジウムの主題を再度取り上げるものである。次の報告集を参照されたい。Kazuhiro Matsuzawa (dir.), *Balzac, Flaubert. La genèse de l'œuvre et la question de l'interprétation*, Université de Nagoya, 2009. 我々はその際にバルザックの作品についての生成論的読解を提示した(« Le dynamisme circulaire dans la genèse de l'œuvre balzacienne. Autour de César Birotteau », pp. 23–33)。ここではより理論的な論点整理を行う。

3 Roland Barthes, « La mort de l'auteur », in *Œuvres complètes*, Seuil, 2002, t. III, pp. 40–45.

た。

生成論はまさにこうした異議申し立てと革新の風潮の中で登場したが、作者の再導入とテキスト性の再定義という目的を持つため、曖昧な位置づけを与えられることになる。アルムート・グレジヨンが喚起するように、生成論は多くの批判に晒されたが、それらは時に文献学に、そしてまた時に文学の構造主義に生成論を関連づけた。どちらにしても、生成論に概念的、また方法論的な新しさを一切認めない、ということだ⁴。

たしかにこの二つの方法論に対して生成論が負うところは少なくない。資料調査に関しては文献学による物質的知識やノウハウを参照しているし、また理論的側面では、いかに逆説的に見えようともテキスト理論に依拠しているのである。テキスト理論とともに作者への回帰を正当化できるのかという疑問が生じるであろうが、よく考えてみるとこの系譜の主張は少しも驚くべきものではない。既に引用した「作者の死」や「作品からテキストへ」⁵など多大な影響力を及ぼした論説におけるバルトのテーゼは、文学コミュニケーションの図式を再定義するというものであった。新たなタイプの読者が提示されたのであれば、論理的にはその対極において、旧来の作者を排除することで新しい発信者の導入が要求されるはずである。バルトは「テキストとともに誕生する」「現代の書き手」⁶にごく簡単に触れただけで、これを放置してしまった。生成論にとって、それは制作中の書き手であり、因果論的ではなく、現在のにして動的な関係をエクリチュールと切り結ぶ存在である。このように再定義された書き手は、自らが執筆しつつあるものの変動に直面し、反作用を蒙り、自らがその全体的射程を知ることのないエクリチュールの可能性をめぐって作業を行っていくオペレーターなのである⁷。

だが、生成論はテキストの「単一性」という概念を否定する点において、先行するアプローチとは一線を画している——それぞれ方向性こそ異なるものの、テキスト論は完結したテキストによる意味作用の揺らぎを特権化し、他方、文献学は「原初の」テキストの復元を主たる目的とし、この概念を維持していたのであった。そこには根底的な問い直しがあり、ジャック・プチによる挑発的なフレーズ「テキストは存在しない」がその旗印となる⁸。実際、生成批評は「エクリチュール」を前面に押し出し、本質的に超越性を持ったそのダイナミズムを強調した。エクリチュールは作者によって統御されず、逆に作者を新たな書記的發展へと誘うのである。したがって「テキストなるもの」はそれ自体としては存在しない——ある作品のいわゆる最終版は生成運動における多くの可能態のうちの一つに過ぎず、作者が何らかの形で手段（修正の意志、出版契約、長命）を有してさえいればさらに更新されえたものである。

テキストの完結という概念を廃棄し、テキストの諸段階の還元不可能な複数性を提起することは、作品の完成の概念に異議を申し立ててきた作家たちの創作をめぐる思考の系譜に連なることを思い起こしておきたい。パスカル、モンテスキューから、フローベール、マラルメを経てポンジュ、ベケットに至る系譜である⁹。生成論はこうしたコンセプトを理論的旗印として、プラン、シナリオ、草稿、あるいは校正刷りといった、ジャン・ベルマン＝ノエルに倣って「前テキスト」¹⁰と呼ばれる資料群に展開するエクリチュールの総体を読解することを提起した。変動の瞬間、異化効果の出現、創造の挙措の導入を明示し、書き手の想像力

4 « La critique génétique : origines, méthodes et finalités », *Équinoxe*, n° 16, 1999, p. 7.

5 « De l'œuvre au texte », in *Œuvres complètes, op. cit.*, t. III, pp. 908–916.

6 « La mort de l'auteur », *op. cit.*, p. 43.

7 Cf. Takayuki Kamada, « Dynamique du sujet écrivain. Enjeux de la génétique balzacienne », José-Luis Diaz et Isabelle Tournier (dir.), *Penser avec Balzac*, Christian Pirot, 2003, pp. 277–278.

8 Louis Hay, « “Le texte n'existe pas”. Réflexions sur la critique génétique », *Poétique*, n° 62, 1985, pp. 147–158.

9 Jacques Neefs, « La critique génétique : l'histoire d'une théorie », Almuth Grésillon (dir.), *De la genèse du texte littéraire*, Tusson, Du Lérot, 1988, pp. 12–14.

10 *Le Texte et l'avant-texte*, Larousse, 1972.

と物質的実現の間の果てしない相互作用を明らかにすることを試みるのである。

それゆえ、長らく創作の「失敗」として価値を認められなかった未完は、定型に収まりきらないエクリチュールの抵抗にほかならず、生成論によって特権化されたのであった¹¹。

以後の生成論の学術機関としての発展については周知の通りである。1974年にルイ・エーの指揮によってフランス国立科学研究センター（CNRS）内に設立された近代草稿分析センター（CAM）は、1982年には巨大な組織に拡大され、近代テキスト草稿研究所（ITEM）となった。このことにより、新しい生成論はその適用分野を広げていく。戯曲、哲学的著作、さらには絵画や建築がこれまでにその論考の対象となってきた¹²。

躓きの石としての解釈の問題

だが、生成論の発展に対して批判や非難がなかったわけではない。コンセプト上の系譜の問題については既に言及したが、さらに本質的な問題として、方法論としての有効性がしばしば議論に付された。たしかに見当違いの批判も存在し、非難が互いに矛盾をきたしている場合もあるのだが¹³、中には極めて鋭い指摘もあり、生成論の教義の曖昧さを衝いている。これに関して、文体論研究者で解釈学者のロラン・ジェニーによる二つの示唆的な批判に言及しておきたい。

第一の批判は『ル・モンド』紙に1996年12月20日に掲載された記事に見られるものである。「生成論研究者の戯言」と題されたこの記事は徹頭徹尾、挑発的なトーンに貫かれている。ジェニーは解釈学者という高みのポジションから新しい方法論である生成論に対し、科学性を標榜していること（まさにそれゆえに組織上は成功を取めたのであろう）は誤りだとした上で、客体化できないもの（作品の起源）を客観的に現そうとし、多量の生成資料に埋没することで解釈的關係を宙吊りにし、また文学作品の実体をその脆弱な支持体に還元している点を批判している。

生成論研究者からの反論は時を待たなかった。同記事で名指しされたピエール＝マルク・ド・ピアジによるものである。それは題名にあるように「解釈学者の混乱」を指摘するという主旨で、1997年2月14日に同じく『ル・モンド』紙に掲載された。ピアジはジェニーの態度に懐古主義を看取する。ジェニーはテキストの完結性という公準に閉じ籠っており、生成論の目的が作品の把握不可能な起源などではなく、再構成すべき前テキストであること、生成論は解釈的關係を廃棄するのではなくより複雑にすること、資料の表層に対する注意は批評的読解の一部をなすものであることを理解しようとし、というのである。この生成論研究者は反撃の身振りを見せ、「かの有名な「完結性」を盾にとって作品の草稿が示すものと明らかに矛盾している解釈はどう考えたらよいのか」と問い、解釈学的読解の限界を指摘した。

ジェニーの遅ればせの反論は2002年の論文に見られる。ここでジェニーは自らの主張の再説を行っているが、戦略的に議論に変化をつけている¹⁴。生成論全体を批判するというよりも、生成論の三つの流派をまず指摘しており、彼によれば、これらは概念的に互いに必ずしも整合性がないものであるという。すなわち、1) 新たな文献学、2) エクリチュールの詩学、3) 痕跡の記録学、の三つである。第一の流派は作品をその諸段階の検証によって解釈することを目的にする。第二、第三の流派はそれぞれ「テキスト」の分析以外の最終目標を持つ。第二の流派はテキスト化と文章化の挙措を追うものであり、第三の流派は脱テク

11 Cf. Louis Hay et al., *Le Manuscrit inachevé. Écriture, création, communication*, Éditions du CNRS, 1986.

12 これについては研究誌 *Genesis. Manuscrits, Recherche, Invention* (Jean-Michel Place) のバックナンバーを参照いただきたい。生成論の理論的基礎付けに関しては、次の批判的論考も参照のこと。松澤和宏「草稿の解釈学」、『文学』、岩波書店、第11巻・第5号、2010、pp. 50-62.

13 Louis Hay, *La littérature des écrivains, Questions de critique génétique*, José Corti, coll. « Les Essais », 2002, p. 89 et suiv.

14 Laurent Jenny, « Hypertexte et Genèse. Naissance d'un grand récit », *Littérature*, n° 125, 2002, pp. 55-65.

スト的で、「徴候的パラダイム」に倣って書記的痕跡を考察するというものである¹⁵。たしかに同論文の主要な標的は第三の流派であり、ハイパーテキストと共存しながら自らが対象とするものの模像に還元されてしまう危険を持つとされる¹⁶。しかし、第一、第二の流派についてもこの批評家は用語的、つまり方法論的な曖昧性を指摘している。生成論研究者は「エクリチュール」の語を、プロセスとしてのエクリチュールと意味作用としてのエクリチュールの両方の意味で用いているというのだ¹⁷。しかるに、整合性を求めるのであれば、いかなるテキストにも還元できない創作の運動そのものを考察するか、あるいはテキストの諸段階の読解——それぞれの読解に対して生成論は実際のところ「構造的」読解以外の方法を持っていない——を行うかのいずれかしかないということになる。こうした区別を行った上で、この解釈学者は生成論の第一の流派における文献学的精神を批判している。というのも、それが「テキストの歴史の中に解釈的保証を求めることによって「本文」の意味を支える」からである。したがってジェニーは自らの方法論を弁護し、そして特にピアジの批判に応答して、「草稿において異なる意味的方向性が標定されても、完成したテキストに対してもたらされた解釈的仮説を覆すことはできない」と強調している¹⁸。

この点に限れば、二人の専門家間で交わされた論争的対話は文献学と解釈学の間古くからの論戦の一変種となっている。こうした対立は実際のところ予測可能であり、ジェラルール・ジュネットの論じるところとなっているので、以下参照していこう。ジュネットはソシュールの有名な比喩を用いて二つの立場の対立軸の所在を明らかにしている。

生成と構造の間の論争というか分裂から、私はソシュールが言語の変遷をチェスの対局になぞらえた有名な一節を常に思い起こす。すなわち、対局のどの時点においても、共時的な位置は「それに先立つ位置には拘束されない。どのような経過でそこに至ったかは全くどうでもよいのである。対局全体を観戦してきた者は、大事な局面で盤面がどうなっているのかのぞきにきた物好きと比べていさかも有利にはならない。この位置を記述するには十秒前に起きたことを想起する必要は微塵もないのだ」¹⁹。

ジュネットは「まずはこの二つの批評活動をできるだけ明確に区別すること」を説きながらも、そこに重要な留保を付している。

だからといって両者が没交渉だというのではない。結局のところ、文学作品はチェス（やその他）のゲームのように、自律的で、「制度設定的なルール」によって全面的に規定される実践ではないのだ²⁰。

ジュネットはこのことに関していくつかの指摘を加えており、我々の考えではそれは生成論の解釈的射程の再考につながるものである²¹。例えば、テキストの美学的評価は、歴史的コンテクストを参照する「芸術的」評価と明確に分離することはできないというのである。この指摘は、2010年に行われたシンポジウム「文献学と解釈学の間」で確認された、読者にとってテキストの可能性はつねに生成と受容の二重のコンテクストにおいて活性化されるという事柄に関連づけることができる。「実証的な」読解と現在化された読解とを

15 *Ibid.*, p. 57.

16 *Ibid.*, p. 64.

17 *Ibid.*, pp. 55–56.

18 *Ibid.*, p. 56. ジェニーはここで以前の反論の際に挙げられた指摘と類似したピアジの指摘を引用している「テキストの草稿が明らかにするものと無関係、あるいは矛盾する構造的解釈はどう考えたらよいのか」(« Qu'est-ce qu'un brouillon ? » in Michel Contat et Daniel Ferrer (dir.), *Pourquoi la critique génétique ? Méthodes, théories*, CNRS Éditions, 1998, p. 58).

19 « Un de mes écrivains préférés », in *Figures IV*, Seuil, 1999, p. 294.

20 *Ibid.*, p. 295.

21 *Ibid.*, pp. 295–296.

截然と区別してしまうのは強引に過ぎるのである²²。その上、今日では「歴史性」²³に対する関心が増大し、それに伴ってテキスト論が退潮したことから、最終版に対する純然たる構造的読解の実践にそれほどの余地は残されていない。歴史性に関して例を挙げれば、メディアの変容（文学テキストの刊行の戦略的な支持体としての新聞や雑誌）や文学空間における近代的知の取り込みなどが十九世紀文学研究の最も活気ある関心的となっており、生成論に重要な役割を与えている²⁴。これら一切は、現代においてメディア、支持体、コミュニケーションのあり方が根底から変動する世界で更新されていく関心に呼応しているのである。

ジュネットは他方、前テキストもまた文学的読解の対象となることを指摘している²⁵。生成資料を探索することは、調査者を科学的関係だけでなく、美学的関係にも置くことになる。生成論的読解はかくして差異の体験——予期せざるものに出合い、意味の倒錯を目の当たりにし、文学的想像力の炸裂に立ち会うこと——となる。逆にテキストは前テキストに対比されることによって、読解可能性と可視性を変容させるのであり、照合されなかった時とは別のものとなる²⁶。実際、生成論に関するラウンド・テーブルの場でポール・リクールは「先行段階のテキストを最終版に再投入すること」を語り、「前テキストは、対比によって理解を促進する間テキストとなろう」と示唆している²⁷。そうであれば、生成論的読解はテキストの新たな解釈に至る大きな可能性を秘めていることになる。生成論が自身の理論的要求に見合う実績を示すべき場合は、まさにそこにあるのだ。

我々としては結論に代え、バルザック『ゴリオ爺さん』のコーパスの事例によって生成論のこうした解釈的可能性を模索してみよう。この小説の末尾の、主人公がパリの上流社会に挑戦状を叩きつける場面に注目しよう。読者におなじみの最終版テキストは次の通りである。

ラスティニャックはただ一人残り、墓地の高台へと数歩進み、セーヌ川の両岸沿いにうねるように横たわり、街灯の灯りはじめたパリを眺めた。彼の両眼はほとんどむさぼるようにヴァンドーム広場の円柱と廃兵院のドームの間に釘付けになった。そこは自らが入り込もうとしたあの社交界が暮らす場所であった。彼はこのざわめく蜜蜂の巣箱に対しあらかじめその蜜を吸い取るような視線を投げかけ、かくのごとき壮大な言葉を口にした——「さあ我々の一騎打ちだ！」。

そして彼は「上流社会」に対する最初の挑戦行為としてニュシンゲン夫人宅へ晚餐を取りに向かった²⁸。

ここで諸段階を全て検証することはできないので、次のヴァージョンが見られる小説の自筆草稿を挙げるにとどめておこう。

やがて彼一人だけになった。彼は墓地の高台へと数歩進み、セーヌ川の両岸沿いに [蛇行] うねるよう

22 Kazuhiro Matsuzawa (dir.), *Entre la philologie et l'herméneutique*, Université de Nagoya, 2011, « Introduction », p. 9.

23 「文学研究に関するこの三十年来の最大の理論的収穫は、まぎれもなく「歴史性」との現実的かつ具体的な親近性である。出来事、概念、言葉といったものが、思考の対象や、自身もまた固有の歴史によって規定される能動的主体による参照対象、つまり経験の様式として構築されていく歴史において捉えられているのである」(Éric Bordas, « Introduction », *Romantisme*, n° 148, « Style d'auteur », 2010, p. 3).

24 Cf. Norioki Sugaya, *Flaubert épistémologue*, Amsterdam / New York, Rodopi, 2010, et Jacques Neefs et Takayuki Kamada (dir.), *Balzac et alii. Génétiques croisées. Histoires d'éditions* (à paraître).

25 アルムート・グレジヨンもまた「前テキストは読解可能な文学のコーパスを増大させる」ことを指摘している(Almuth Grésillon, *Éléments de critique génétique*, PUF, 1994, p. 17).

26 松澤和宏「テキスト生成論をめぐる解釈学的考察」『統合テキスト科学の地平』名古屋大学大学院文学研究科, 2007, pp. 67-68.

27 Paul Ricœur, « Regards sur l'écriture », in Louis Hay (dir.), *La Naissance du texte*, José Corti, 1989, pp. 218-219.

28 Balzac, *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 12 vol. (désormais abrégée en *Pl.*), 1976-1981, t. III, p. 290.

に横たわり、街灯の灯りはじめたパリを眺めた。彼の視線はほとんどむさぼるようにヴァンドーム広場の円柱と廃兵院のドームの間に釘付けになった。そこは自らが入り込もうと [する] したあの社交界が暮らす場所であった。そしてこの [文明] ざわめく蜜蜂の巣箱に対しその蜜を吸い取る視線を投げかけた。[「我々の」] 彼はかくのごとき崇高な言葉を口にした——「さあ我々の一騎打ちだ！」。

そして彼はアルトワ街に徒歩で戻った²⁹。

「ざわめく蜜蜂の巣箱」という表現の背後に「文明」という別の表現が姿を現してくる。書かれたそばから抹消されているものの、この痕跡は興味深い。この異文によって、我々は換喩的指示（文明の精華としてのパリ）から動物的隠喩への横滑りに立ち会うことができる。動物的隠喩が、後に自身の「大作」のコンセプトを「人間性／動物性」というアナロジーに組織的に関連づけることになる小説家にとって自家薬籠中のものであることは周知の通りである。このアナロジーは『人間喜劇』の「総序」で解説されているが³⁰、既に本作中において大々的に活用されている³¹。こうした比喩の可能性はここでまず範列的競合として姿を現し、その後、再版の際に説話論的イゾトピー——巣箱の蜜を吸うこと、「上流社会」で晚餐を取ること——として展開した。冒頭部の描写から最終場面へと、物語の両極はアナロジーの原理をめぐって接合されるのである。

このように生成資料の総体は、作品の本文を新たな相貌のもとに読解するために踏査すべき多数の痕跡を蔵している。以上の検討から、生成論の解釈的効力の問題についての我々の結論は肯定的なものとなる。

29 Lov. A183, f° 72r°. 括弧内の横線は抹消を表す。ただし、訳文のため、原文と正確には対応しない箇所もある。

30 *Pl.*, t. I, p. 7.

31 柏木隆雄による、ヴォケー館の「動物学的」描写の詳細な分析を参照のこと（『『ゴリオ爺さん』における「知ること」』『大阪大学大学院文学研究科紀要』第42巻, 2002, pp. 6-10）。